

2014年4月18～20日 「福島まなびの旅」

原発事故の福島県（いわき市・会津若松市・二本松市）を訪れて

平山光子

県内どこでも満開の見事な桜が私達を出迎えてくれた。福島市の花見山では、桜を始め、ヤマモモやウメ、レンギョウ、ロウバイ等春の花々が色鮮やかに咲き誇っている。桃源郷と言われているのも頷ける。

観光ガイドブックに「春から夏へ、つぎつぎと花咲き誇る花の王国ふくしま」とある。こんなのでかで美しい地域で暮らす多くの人々が、原発事故から3年が過ぎても当たり前前の日常を奪われたまま、苦難が続いている。

今回の「福島まなびの旅」でたくさんの福島の皆さんにお会いし、様々なお話しを伺った。



様々な花が咲き競う花見山
実は線量が高いところと後で知る…

1. 浜通り（いわき市 生活介護事業所「アライブ」 居住制限区域の富岡町）で

○ 生活介護事業所「アライブ」センター長 長谷川秀雄さん

「国・県から何の情報もなくテレビで知っていわき市の人々も避難した。職員の半数が避難してしまう中で訪問介護を継続した。重度の障害者や老人の置き去りもあった。集団での急な避難は困難だった。震災直後より関連死が増えている・・・」

○ 双葉地方原発反対同盟責任者 石丸小四郎さん（富岡町住人、いわき市で避難生活）

「福島県は甚大な被害を受け、人口が激減。震災関連死認定者1699人、申請者は3000人超。原発事故終息の目処は全くたっていない、ますます深刻さが増している。誰一人責任を取らず、原子力関係予算を増やしているのは『原発事故焼け太り政策』 汚染水対策は苦闘が続き、下請け労働者の被曝と使い捨てが行われている。日本は原発があってはならない国・・・」

○ 石丸さんと共に居住制限区域の案内 元富岡町役場原発安全対策担当 白土正一さん

「原発の安全性については言い過ぎることはないとの立場で、原発反対の石丸さんとも仲良くしてきた。中間貯蔵施設、最終処分場は3000～4000億円の交付金をもらってきた双葉郡内に作る役割と責任がある。当日は情報が届かず町村民は着の身着のまま避難した・・・」

2. 遠く離れた会津地方（会津若松市 若松栄町教会・会津放射能情報センター）で

○ 若松栄町教会 会津放射能情報センター代表 片岡輝美さん

「国は緊急時には国民の命を守らない、そこで放射能から子どもの命を守る会を立ち上げた。安心して暮らしたいから情報を収集し行動している。観光の町だから除染はされない。原発事故は人の命、人間関係、権利を奪った。毎週金曜日に沈黙のアピールをしている。子どもの身体に変化が起こっている、母親達はそのことで苦しんでいる・・・」

○ 福島市渡利地区から避難、県内自主避難の会を立ち上げた Oさん

「花見山のある地区に住んでいたがかなり高線量（1.3～2 μSv/h）、洗濯物が外に干せない。特定地区にも指定されず4歳の子どもの健康が気になった。昨年やっと除染されたが降雪でまたもどった。夫の転勤で会津に来ることができ、やっと同じ思いの方と出会うことができたが経済面や心無い言葉に苦しんでいる・・・」

○ 避難所で知り合った子どもの親代わりとして3年間 斎藤久美子さん

「歯科衛生士、喜多方市の住人。仙台市で震災に合い助けられ3日目に帰ることができた。喜多方の避難所でボランティア。当時4年生、南相馬市の田村明日香さんと出会った。行き場のない明日香さんを預かり、多くの人に支えられ3年間一緒に暮らすことができた・・・」

○ こころのケアの支援をしている精神科医 小林恒司医師

「被災地の困難性の中で、命の重さに深く目覚め守ろうとした人が苦しい思いをしている。子どもの命を守ろうとする母親は到達できない目標に向かって努力させられているようなもの。困難性を引き受けて生きる中に尊いものが生まれている、そんな価値あるものに出会いたくて来ている。ケアの本質は、存在を支え合う人間関係の中にある。皆で共有したい・・・」

3. 線量が高い中通り（二本松市 真行寺・青空市場委員会）で

○ 浄土真宗大谷派真行寺ご住職 佐々木道範さん

「二本松でも除染がやっと始まったが宗教法人は対象にはならないので自分でやっている。通学路でも高線量、公園の除染も法面はやってない。行政はそんな対応ばかり。国は命より守りたいものがあるよう。マスクはきちんと報道しない。放射能の影響が無くなるまで子どもを被曝させないよう頑張っていくしかない。3年頑張ってきたが皆疲れている・・・」

○ 真行寺青空市場委員会代表 佐々木るりさん（住職夫人、5人の子の母）

「事故の前までは原発に無関心だった。事故も14日に知り、夫からここからすぐ逃げろと言われて新潟に逃げた。事故が命に関わることと初めて知った。2ヶ月半で福島に戻ったが子どもを部屋に閉じ込め外に出せず、食べ物に迷う日々、暮らしていけるか不安だ。保養先で4歳の子どもが『お外に行かせてくれてありがとう』と言った。子どもに申し訳ない・・・」

○ 二本松市生まれ、市内在住 小2と年中児の母 渡辺みゆきさん

「原発はよそ事だった。震災当時、原発よりも余震と食べ物やおむつが無くなるのを心配した。木造の賃貸住宅、子どもは家の中で過ごさせたが積算線量が高かった。山側の部屋は線量が高い。2013年9月に除染されたが、まだ0.3~0.5μSv/hある。福島ナンバーの車で駐車場に入れてもらえなかったことがある。正しい恐がり方を・・・」

○ 青空市場委員長 中1、小5、小2の母 遠藤文美代さん

「福岡出身、12年前嫁いできた。震災後実家に避難する新幹線内で福島から来たことを話したら、席を立たれた。友達からも何も持って帰るなと言われた。震災後辛かったが、温かい人とも出会えたのが心の支え。小さい命と向き合い、葛藤しながら精一杯生きている・・・」

○ 小4、小2の母 加藤ともえさん

「今年は震災前と同じように学校行事を行うようとの教育委員会からの連絡があった。校長先生の理解で畑の作業は今年もしないと決まった。早く野山で駆け回って安心して遊べるようになって欲しい。全国から青空市場にたくさんの野菜が届き子どもたちも待っている。

それぞれの状況は違うけれど、迷いや怒り、希望と失意の間で揺れながら、語り尽くせないほどの困難を抱え、それでも力を合わせて頑張っておられることを改めて思い知る。この方々の困難はいつまで続くのだろう。

私達は、ただただ涙して聞くだけで、言葉は見つからない。帰りには笑顔で「来てくれ、聞いてくれてありがとう」と言っていたら、「また来ます」と言ってお別れした。

2012年2月、社民党原発事故調査団に参加し、初めて福島県を訪れ、福島市から飯舘村を通り、南相馬市、当時は警戒区域（第1原発から20キロ圏内）の双葉郡～いわき市を、今回と同じ石丸小四郎さんにご案内いただいた。富岡町の石丸さんの自宅前でマイクロバスを降りた時、荒れ果てた状況と数十 μ Sv/時という高線量に驚いたが、今回も線量は相変わらず高かった。ところが、現在は自由にに入れる居住制限区域であり、道を挟んだすぐの隣家は帰還困難区域になっている。県民を分断し対立を生んでいる補償の違いはこの線引きに依っている。居住制限区域とはいえ、申し訳ないが石丸さんがここに帰られる日が近々来るとは思えない。石丸さんは、眠れない日が続き病にも倒れられたという…。

4. 旅を終えて

これが原発事故の現実だ。一番苦しんでおられるのは福島県民だが、福島県の人々だけの問題ではない。東北・関東圏を中心に特に子どもを抱えた多くの母親が苦しんでいる。

超党派の議員立法で成立し、期待された「原発事故子ども・被災者支援法」は具現化されず、具体的な支援の手は被災者には十分届いていない。政権につくなり自民党議員はこの議連から脱退したというから呆れる。

再び福島県を訪れて、県民の思いを無視し原発事故はまるで過去の終わったことのように扱い、原発への依存へ回帰し、輸出までしようとする現政権の姿勢に、改めて大きな怒りを覚える。

原発推進を軽々しく言う政治家は、福島県を訪れて県民の声をきちんと聞いてほしい。

早く、支援法の具現化を図り、被災地の復旧・復興予算は、自治体の裁量に任せるべきだ。また、住民には、避難指示地域内外を問わず避難する権利を認め最大限の支援をすべきだ。

地震大国日本の各地にまだ50基もの原発がある。九州も、玄海原発や川内原発が再稼働され、同じような事故が起これば私達自身の問題になる。無関心でいられるはずがない。

こんな大きなリスクを伴う原発に依存する政策を一日も早く変えなければならない。

企画に賛同して同行いただき、現地の深刻さを一緒に肌で感じた仲間が増え本当に良かった。福島県を忘れないためにもまた訪れたい。

5. 番外編（4月22日～24日、また福島へ 坂上さんと再会）

偶然にも、大牟田市議会改革特別委員会の視察が福島になり、一日おいて会津若松と郡山をまた訪れた。

着いて1時間ほどの時間があつたので、大熊町から避難しておられ2012年に大牟田でも講演していただいた元福島第一原発作業員の坂上義博さんと再開し、桜満開の鶴ヶ城を案内していただいた。

「いいよ、毎日暇してる。何もすっことねんだもの・・・」

福岡空港からお会いできるか電話したときの坂上さんの返事だった。「被害者面で、遊んで暮らしている」との心無い誹謗・中傷もあるという。

生まれ育った家も故郷も生きがいがいった畑仕事も無くし、健康上の理由から家族と離れて一人で暮らす坂上さんの避難生活が今も続いている。

